

日本語と日本語話者の多様性とは何か

—言語と話者の多様性に対する理解の育成—

柴田 智子（プリンストン大学）

米本 和弘（東京医科歯科大学）

1 日本語と日本語話者の多様性

現在、日本社会における様々な言語的、文化的背景を持つ人々への対応の必要性についての認識が広がりつつある。日本語教育分野においても、教育・言語政策面での議論が進むと同時に、やさしい日本語（庵 2013, 佐藤 1996）や Translanguaging（Garcia & Wei 2014, 加納 2016）といった言語の多様性や複数性、重層性に目を向けた言語教育の必要性が認識されつつある。ただ、実際に日本語話者の多様性に対する理解の促進・育成について考えた場合、以下の2点の問いが浮かび上がってくる。

1) 日本社会において理解が目指されるべき日本語と日本語話者の多様性とは何か。応用言語学分野では絶対的な規範や標準に疑問を投げかけ、多様性や複数性に目を向けた言語観が広がりつつある。しかし、日本語という言語を考えたとき、大部分の日本語話者が日本に集中しているという性質上、「国=言語=話者」との考えも根強く（酒井 1996, 佐藤・ドーア 2008）、多様性が外から「やって来る」ものとして捉えられることが多い。そのため、日本語や日本語話者についての議論も母語話者や単言語話者を規範、基準として行われがちである。

2) 日本語と日本語話者の多様性への理解の育成・促進はどのように行うことが可能か。上記のような問題意識の下、加納（2016）の Translanguaging を取り入れた実践など、多様性に目を向けた日本語教育実践も行われつつある。ただ、現実にはこのような多様性への観点も、教員の教室外への働きかけが不十分であることが一つの要因になり、教員や専門家の間にとどまってしまっているのが現状である。

このことから、本発表では、先行研究を基にした日本語と日本語話者の多様性についての議論を行い、その多様性に対する理解育成を目的に開発したリソースの有効性について検討することを目的とする。日本語教育関係者が日本社会の一般の人々を対象として、母語や単言語話者を規範や標準とする考えを乗り越え、一括りにされてしまいがちな「日本語」と「日本語話者」の中にある多様性に対する理解の育成・促進の方法を模索、提示できる点において、本発表は日本語教育に寄与できると考えている。

2 ウェブリソースの構築

現在、上記のような問題意識の下、カナダ日本語教育振興会とヨーロッパ日本語教師会が「日本語」と「日本語話者」の中にある多様性に対する理解の育成・促進についての共同プロジェクトを実施している。

プロジェクトチームでは日本語と日本語話者の多様性を人々に実感してもらうために、まずは様々な日本語話者をインタビューすることにした。インタビュー対象者は日本語を

話す人や日本語に興味を持つ人全てである。これまでインタビューしたのは、日本にいる留学生や海外の日本語学習者、日本語を母語とする日本語教師などの日本語教育に関係がある人々をはじめ、一般の日本人、日本語話者も含まれる。

インタビューではまずその人が生まれた所や育った所でどのような言葉を話したか、次に学校教育で使用された言語や外国語学習についての経験を語ってもらう。また、該当する人には、留学や旅行の際の言語にまつわる経験も聞く。そして、その人が言語使用に関して（例えば日本語を使用した際）どのような経験をし、その際に、どのように感じたり、行動したりしたのかを詳しく話してもらう。日本人や日本語話者と日本語での交流経験があった場合、その時に思ったことや感じたことについても説明してもらう。最後に今後、日本語を使ってコミュニケーションをする人に向けてのアドバイスやメッセージも話してもらう。インタビューは可能な限り2回に分けて行い、1回にだいたい1時間程度話してもらう。なお、インタビューを受けてくれる人には前もってプロジェクトの主旨とビデオ撮影などについて記載された同意書を読んでもらい、署名してもらっている。撮ったビデオは2名のプロジェクトメンバーが見て内容を書き起こし、その人の言語意識や言語経験について語られている部分を選び、2～5分ほどの短いビデオクリップをいくつか作成する。ホームページ掲載用に、その人の背景情報をインタビューの内容をもとに作成し、ビデオクリップとそのスクリプトを合わせ、その人の「声」としてまとめる。最後に、本人の確認を経て、ホームページに掲載している。

このように集めた「声」でビデオアーカイブを構築し、それをホームページ上で公開し、だれでも使えるリソースとして使えるようにしている。このホームページ「セカイの日本語～みんなの声～」(<https://globalnetworkproject.wixsite.com/main>) (図1)には2019年12月現在、11本のインタビューが公開されている。撮影を行なったインタビューはすでに20本近くあり、これから順次残りのビデオも公開すると同時に、インタビューも継続して行う予定である。また現在は記事は日本語のみでの記載であるが、今後は英語などの翻訳もつけることも計画している。さらにビデオが増えた場合の検索方法としてそれぞれのインタビューにタグ付けをし、それで検索できるようにすることも計画している。



図1 「セカイの日本語～みんなの声～」のフェイスページ

3 ウェブリソースの利用方法

日本語使用者の「声」をインターネットで公開したのは手軽に誰でもアクセスできると考えたためである。このホームページは現在、カナダ日本語教育振興会のホームページからもリンクしており (<https://www.cajle.info/programs/gn-project/>)、同時にこれまでのプロジェクトの研究成果も掲載している。これと並行し、プロジェクトチームでは様々な場所でワークショップも実施している(2019年4月オタワ、5月トロント、8月バンクーバー、9月セルビアのベオグラード、12月東京)。このワークショップでは、日本語および日本語使用者の多様性について参加者に考えてもらい、これまでの一元的な考え方について再検討してもらうことを目的としている。そして、「セカイの日本語～みんなの声」のリソースを紹介し、リソースの使用例もワークショップで紹介したり、参加者とともに考えたりしている。

リソースの利用方法として、例えば、日本語教育専攻の授業履修者たちにこのリソースを見せて、自分たちが扱う言語や学習者について固定的な考え方をする危険性を示唆したり、海外の日本語学習者たちに見せて、自分たちも日本語使用者の一人であるという自己認識を持ってもらったりするようにする。他にも海外で子育てをしている人たちにこのリソースを紹介し、子どもを育てる際に言語をどう取り扱うか考えてもらったり、日本の小学生たちに見てもらい、色々な人が話す日本語に対する意識を広げてもらったりするなど、色々な利用方法を考えている。今後、その利用方法をホームページで紹介したり、実践例を載せたりしていく予定である。

<参考文献>

- 庵功雄 (2013) 「『やさしい日本語』研究の現状と今後の課題」『一橋日本語教育研究』2, pp.1-12.
- 加納なおみ (2015) 「Translanguaging strategies developed by multilingual students in a Japanese graduate program」日本におけるトランス・ランゲージング研究中間報告会発表資料.
- 菅野康子 (2014) 「Identity and language education: Are there such things as “World Japaneses”」カナダ日本語教育振興会 2014 年年次大会基調講演資料.
- 酒井直樹 (1996) 『死産される日本語・日本人—「日本」の歴史 - 地政的配置』新曜社.
- 佐藤和之 (1996) 「外国人のための災害時のことば」『月刊言語』25 (2), pp.94-101, 大修書店.
- 佐藤慎司・ドーア根理子 (2008) 『文化, ことば, 教育—日本語／日本の教育の「標準」を越えて』明石書店.
- 細川英雄 (2002) 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社.
- García, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. New York: Palgrave Macmillan.